

日本カメラ博物館 JCIH ライブラリー  
学芸員 宮崎真二

みやたけとうよう

宮武東洋 (1895-1979) は、現在の香川県仲多度郡まんのう町に生まれ、14歳のときアメリカ・ロサンゼルスに移住していた父親に呼ばれて海を渡ります。やがて写真に興味を抱き、1918年に写真家のハリー・K・シゲタに師事したのち、1923年に「東洋写真館」を開業しました。同所では写真館業務に加え、日本語新聞『羅府新報』の写真を担当したほか、滞米する日本人に対しての世話や芸術家たちへの支援、私費を投じて1932年に開催されたロサンゼルスオリンピックの撮影と写真送付の便宜をはかるなどの活動を行いました。

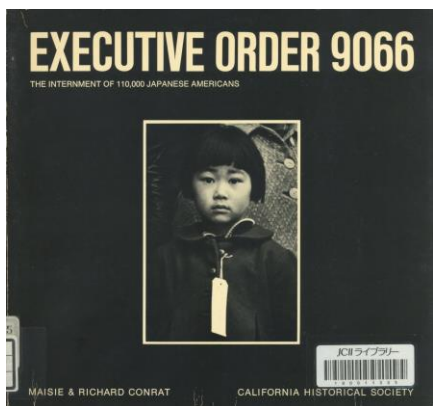
しかし、1941年末に太平洋戦争が勃発し、翌年春、国防上不適当とされる人物の強制退去を許可する EXECUTIVE ORDER 9066 (大統領令 9066号) が発せられました。以前からアジア系移民に対して反感の強かった西海岸地区では、日本人に加え日系アメリカ人までもが収容所への強制隔離を命じられました。宮武も砂漠地帯に設けられたマンザナー収容所へ移動させられました。

しかしその際、写真レンズを隠して持ち込み、所内で大工に木のカメラボディを作ってもらい、秘かに所内の様子を撮影開始しました。やがて収容所長の知るところとなりましたが、宮武と旧知の間柄であった写真家のエドワード・ウェストンの働きかけもあって公式に収容所内の記録撮影ができるようになり、生活の様子を克明に記録したほか、営業写真家の技能を生かして集合写真などを数多く撮影しました。

1960年代に高揚した黒人の公民権運動に続き、合衆国憲法に反する人種差別の事例として、大統領令 9066号と強制収容について再検証する動きがおこり、1972年には CALIFORNIA HISTORICAL SOCIETY (カリフォルニア歴史協会) が展示を開催し、写真集が発行されました。本展示は WRA (WAR RELOCATION AUTHORITY・戦時移住局) で記録撮影に携わったドロシア・ラングの作品を中心に構成され、『カメラ毎日』1972年9月号で特集されました。

また同じころ、ウェストンについて調べるため宮武と交流を深めていた写真家の細江英公は、収容所での写真を見せられ、ぜひとも日本で紹介すべきと考えました。1975年、この展示が日本へ巡回するにあたり、同誌の山岸章二が構成を担当し、宮武の写真約100点などを含めたものとなりました。その様子は同誌1975年6月号で見ることができます。

本展示の反響もあり、宮武は1976年に勲六等単光旭日章を授与されました。また1980年4月には東京・日本橋三越で写真展「宮武東洋の世界」が開催され、図録が発行されています。1984年には本展示の監修を行った細江と作家の藤島泰輔により、宮武の作品と人物像をまとめた『宮武東洋の写真』(文藝春秋)が発行されました。2008年には、すずきじゅんいち監督によるドキュメンタリー映画『東洋宮武が覗いた時代』が制作されました。



『EXECUTIVE ORDER 9066』



『宮武東洋の写真』